

# 令和4年度 郁政クラブ 行政視察報告書

視察日 : 令和4年11月9日(水)～11月11日(金)

視察先 : 長崎県大村市 「ミライ on 図書館の運営状況」について

熊本県阿蘇郡南阿蘇村 「新阿蘇大橋および震災ミュージアムの運営」について

福岡県那珂川市 「こととば那珂川の運営」について

参加者 : 内田 卓男                      矢口 清                      海老原 一郎                      篠塚 昌毅  
小坂 博                      下村 壽郎                      島岡 宏明                      塚原 圭二  
勝田 達也                      矢口 勝雄                      奥谷 崇



ミライ ON 図書館 (長崎県大村市)

視察日	令和4年11月9日(水) 14:00~15:00
視察先	ミライ ON 図書館【長崎県大村市(人口9.7万人、面積 126.73 km <sup>2</sup> )】
目的	長崎県と大村市が共同運営している施設の管理状況、運営について学ぶ
内容	ミライ ON 図書館の運営状況について
担当課	大村市立図書館 白石館長、堀江副館長、大村市歴史資料館 今村館長

## ◆ 「ミライ ON 図書館」について

## 1. 施設概要

令和元年10月に開館したミライ on 図書館は、県立図書館と市立図書館の施設区分のない一つの図書館として整備され、目指す図書館像として「知の拠点として県民市民を支える図書館」「全ての県民市民がサービスを利用できる図書館」「県民市民と共に創る図書館」「出逢いにあふれる楽しい図書館」「未来を創造する礎を築く図書館」「郷土(ふるさと)の歴史と文化に親しみ、活用及び振興する図書館」を掲げている。

- 建築構造： 鉄骨造6階建(高さ22.8m)  
敷地面積 16,217.81 m<sup>2</sup> 建築面積 4,873.95 m<sup>2</sup> 延床面積 11,657.88 m<sup>2</sup>
- 駐車台数： 205台(駐輪場 約100台)
- 収蔵能力： 202万冊(九州最大規模) ※現在、沖縄県立図書館が九州最大
- 建設費： ミライ on 図書館全体 約93億円  
(図書館 約68億円、歴史資料館 約12.1億円、植栽・市道改良等 約8.5億円)  
その他  
(図書館システム 約2.4億円、木製家具 約0.6億円、解体費用 約1.4億円)

- 主な施設内容：1階 多目的ホール200席(※)、こどもしつ101席(※)
- 2階 研修室76席(※)、学習スペース104席、グループ学習室24席(※)
- 3階 資料閲覧席231席(※)、対面朗読室2室(※)
- 4階 資料閲覧席116席(※)

※コロナ禍前の定員、現在は一部を減じて運用。グループ学習室、対面朗読室は現在も休止中。

## 2. 費用負担割合について

- ・建物は面積按分により決定。県：市=1.53：1の割合がベースとなっている。
- ・建物の持ち分所有は、登記については建築費用の費用負担に準じた延床面積による按分。ただし、閉架書庫等は最終蔵書冊数(県172万冊、市30万冊)に応じて区分されている。
- ・土地については、登記上の所有権は大村市。ただし、長崎県と大村市の間で土地使用契約を締結し、長崎県の恒久的使用権を設定している。

## 3. 図書館の運営方式について

- ・市の直営方式を採用。図書サービス等の提供に関しては、資料収集・整備、レファレンス、イベントは常勤の司書、カウンター、バックヤード業務に就いては会計年度任用職員で対応しており、県・市の役割ごとに業務分担をしている。

- ・施設・設備の運転や維持管理に関しては、県から市へ事務委託されており、具体的には空調・照明、駐車場、清掃、警備、植栽、施設・設備の点検、多目的ホール等の貸出等を行っている。
- ・組織、人員配置については、組織、職員配置及び職員の併任などの他、共同運営に関する必要な事項を定めた「業務連携に関する協定書」を締結し、明確な業務分担を行っている。
- ・資料の購入に関しては、一般書籍は県が専門・学術書や高額図書、市町からのリクエストがあった図書、市は小説、文芸書、実用書、趣味に関する図書。児童書については、県が全点購入、市は複本購入。視聴覚に関する図書は、市が予算の範囲内で購入することになっている。
- ・実際の業務分担では、レファレンスサービスは市 8 人、県 3 人、カウンターサービスは市 16 人、書庫出納は市 9 人、県 5 人と決められている。
- ・視察の受け入れについては、県が都道府県、都道府県議会、市は市、市議会、市内団体となっており、見学の受け入れについても、県が県立、私立、県内団体、市が市立、市内団体と分担している。
- ・職員配置の状況は、図書館長 1 人（県）、副館長 2 人（県 1、市 1）、総務 5 人（県 3、市 2）、資料 7 人（県 6、市 1）、サービス 10 人（県 3、市 7）、企画・広域支援 6 人（県 6）、合計 31 人（県 20、市 11）となっている。

#### 4. 共同運営のメリット

##### (1) 図書資料等の充実

- ・蔵書冊数で見ると、平成 30 年度末の 20 万冊から令和 3 年度末には 131 万冊に増加。蔵書収蔵能力も 202 万冊と九州最大規模。新聞は 62 種類、雑誌は 536 種類を収蔵。

##### (2) 読書・学習環境の充実

- ・閲覧、学習スペースは、旧市立図書館の約 10 倍、旧県立+旧市立図書館と比較しても 4 倍の規模になり、500 席を超える閲覧席が確保できた。
- ・空調、照明等の自動制御管理を導入した。

##### (3) 新しいサービスの提供

- ・新たなサービスとして、課題解決支援サービス、視覚障害者向けサービス、遠隔地返却サービス、オンラインサービスの開始、SNS の活用等を行っている。

##### (4) 既存サービスの充実

- ・市町立図書館の支援、行政・大学への支援・連携、多様な人材への育成に取り組んでいる。

#### 5. 共同運営における課題

- ・職員間の一体感の維持・醸成が難しい
- ・司書職員の不足により、図書館運営を担う人材の育成が課題
- ・図書館の ICT 化、DX を進めるための財源の確保
- ・今後の「まちづくり」への貢献（施設の有効活用、イベントへの協力）
- ・自治体職員として異なる役割（気象災害、火災等時の責務の違い、自治体内での職員連携）

#### ◆主な質疑応答

Q：維持管理費の費用負担割合はどのように決まっているのか。

A：基本的には、1.53（県）：1（市）の基準により按分しているが、図書館情報システムに関しては別の基準で、それぞれ細かく設定している。

Q：イベントや企画実施時の役割分担はどのようになっているのか。

A：基本的には県は県で、市は市で企画立案、実施している。今まではコロナ禍だったため、イベント件数は少なかったが、今後、イベントを再開した場合、似たようなテーマのイベントが行われる可能性がある。県と市でそれぞれ年間計画を出し合い、来年以降調整する必要があると考えている。

Q：県と市で共同運営することになったいきさつを伺いたい。

A：県、市のそれぞれの首長同士の強い意志だと思う。当時の県知事や県教育長、大村市長のトップの意向が強く働いた。県は当時、県立図書館の移転・建て替えを急いでおり、市の計画と県立図書館の建て替えが同じタイミングで動き出したことから、共同運営の話が進んだ。

Q：学生の利用はどのような状況か。

A：前市長は大村市に大学を誘致する構想を描いていた。その布石として図書館の設置を考えていたが、結果として長崎大情報科学部の誘致は断念せざるを得なかった。しかし、駅も近く多くの学生に利用してもらっている。

#### ◆各自の感想

〈内田卓男〉

すべての県民市民がサービスを利用できる図書館を目指した大変希少な県立市立合同した図書館である。建設費は93億円、持ち分所有は費用負担に倣い、1.53：1の割合。特に閲覧スペースが500席をこえる。大村駅前であり、市外からの利用者には便利かと。長崎大学の誘致に努力したが断念した。高等学校は4つある。以前、武雄市の図書館を視察したが、コンセプトに似たものを感じる。環境を意識した、木質の建材が目立った。特に書庫の型式に意識しているのを感じた。土浦市には参考にするものがない。

〈矢口清〉

大村市は長崎県の中央に位置する市。東は多良岳県立公園、西は大村湾を望む自然豊かな市である。また、長崎空港があることから、長崎県の玄関口としての面も併せ持つ。長崎県の市で第2位。長崎県で第4位の人口を有する。九州では第32位の人口を有する都市である。ミライ on 図書館は、長崎空港に近く国道にも近い、交通の利便性が良いところにある。建物自体は6階建てで、一般利用者は4階まで入館できる。館外から見た「ひとつ屋根」三日月型、湾型の形状は、大村湾や大村の扇状地形をイメージしたもの、館内から見た「ひとつ屋根」「段状にずらし積層にした空間構成」、「ブックドック（閉架書庫を中心部に積層）」、自然採光と電気による人工照明を併用、読書に必要な館内の明るさを保てるよう、建物南西側の壁面は、ガラス張り一面となっている。

夜間は管内からの照明が、芝生広場や通行帯を照らすことで、安全に通行できる。

建築物としての評価も高い。2022年には、グッドデザイン賞に輝くなど、数々の賞を受賞している。

ミライ ON 図書館は、県立・市立一体複合型図書館である。収蔵能力は202万冊、そのうち開架図書は25万冊である。ちなみに「駅直結図書館“土浦市立図書館アルカス”は44万冊である。

建設費用は、ミライ ON 全体で約93.0億円である。その他に、図書館システム約2.4億円、木製家具約

0. 4億円、解体費用約1.4億円である。

運営方式は、直営方式を採用している。

図書資料等の充実、読書・学習環境の充実、新しいサービスの提供、既存サービスの充実、を図っている。共同運営における課題としては、職員間の一体感の維持・醸成、「まちづくり」への貢献、地域のイベントへの協力等があります。

〈海老原一郎〉

令和元年にオープンした、長崎県立と大村市立の一体型図書館で、長崎県立長崎図書館と大村市立図書館が、共同運営している施設でした。県と市がどのような役割分担をしているのかは、説明で、図書館長などは、県職員が担当、市の職員は、受付担当など、はっきり分かれて、上手く、運営されていました。建物は、木材がふんだんに使われておりました。説明の中で、県立と私立の一体型にしたのは、最終的には、市長の判断とのこと、やはり、トップの判断は重要と感じました。

〈篠塚昌毅〉

長崎県大村市に2019年10月にオープンした長崎県と大村市が共同運営する「ミライON図書館」は鉄骨造6階建、床面積11,657.88㎡、九州最大規模の収蔵能力202万冊、建物は大村湾や大村の扇状地形をイメージした三日月型のひとつ屋根で館内は自然採光と電気による人工照明を併用、読書に必要な館内の明るさを保てるように建物南西側の壁面は、ガラス張り一面となっています。2019年7月には国交省が主導する建築物の省エネに特化した第三者評価機関から省エネに優れた建築物としてZEBを認証されています。また、2020年にはグッドデザイン賞を受賞する他にも数々の賞を受けているなど環境性能とデザインの両方で評価の高い近代的な図書館です。

名称の『ミライON』は一般公募し高校生が考えた「自分、貴方の未来にONする図書館」を採用したそうです。県と市が共同運営する図書館は業務連携に関する協定書を締結し、職員数、資料の購入などの業務分担を行い運営されています。建物の維持管理費などの運営にかかる費用は出資比率に乗じた負担割合をしているとの事でした。共同運営による主なメリットとして、図書資料等の充実、読書、学習環境の充実、遠隔地返却サービスやオンラインサービスなどの新しいサービスの提供、既存サービスの充実があります。今後の課題としては、職員間の一体感の維持、醸成や図書のデジタル化の財源確保、地域イベントの協力等があげられています。館内に大村市歴史資料館を併設し、大村駅前の整備と合わせて建てられた「ミライON図書館」は街のシンボル、市民交流の拠点などなど大村市のまちづくりに大きく貢献する素晴らしい施設でした。

〈小坂博〉

収蔵能力は約202万冊というとても多く、とても大きな施設ですが、実は長崎県の県庁所在地である長崎市に大きな土地がなく、近隣の市町村である大村市に県立図書館をつくらうということになり、結果、都道府県(長崎県)と市町村(大村市)が共同運営する図書館となりました。運営についてはパートごとに県と市がすみわけをして運営をしてスムーズにしているということで見聞にあたいするものでした。

〈下村壽郎〉

土浦市立図書館と比較して

- ・ 県立図書館と市立図書館で長崎県と大村市の共同運営である。
- ・ 図書館部分の面積は、アルカス土浦が5,120㎡に対し11,726㎡と2倍以上の面積であり、県立図書館との共同運営がメリットになっている。

- ・蔵書冊数では、旧市立図書館では20万冊であったが県立図書館と共同運営となり131万冊と拡充された。アルカス土浦は開館当時35万冊である。
- ・運営方法は、アルカス土浦が業務委託方式に対して、直営方式を採用している。

まだまだ比較する要素はあるかと思いますが、長崎県と大村市の共同運営である図書館を比較はこの程度とします。

まとめ

長崎県と大村市の共同運営であることのメリットが、随所に現れていました。

施設全体として、敷地面積・駐車台数・収蔵能力などにおいて単一自治体では設置できない大規模な施設である。建築物としての評価は、2019年 BES ZEB Ready 2020年グッドデザイン賞、2021年 BSC 賞を受賞し 2022年 SDG s 賞に応募 カーボンニュートラル賞に応募と建築界に留まらず、SDG s 達成に向けた顕著な取り組み、低炭素から脱炭素へと切り替わり時代が要求し必要とする先進技術を採用した建築物である。

土浦市でも人口減少が進み財政的な困難があるとすれば、県と土浦市のコラボする施設を考える参考事例になると思われます。

〈島岡宏明〉

この未来 on 図書館は小さい子どもからお年寄りまでみんなが行ってみたいくなるような図書館だなと感じました。その外観はひとつ屋根で三日月型、湾型の形状は大村湾や大村の扇状地形をイメージしたものです。設計した方の大村への思いと図書館を利用する人達の事を良く分かって作ってくださってるんだなと思いました。

建物の評価もいくつもの賞に輝き、利用する人にとっても誇らしい建物であったのではないのでしょうか。内容的にも県立図書館、市立図書館、市の資料館が併設されており、市と県が融合した素晴らしい施設となっていたのには驚きました。一つだけ難点を言うと、トイレにウォシュレットがついていませんでした。

土浦市の図書館もこのような多目的であり、多角的な図書館をまねることで、もっと良くなる可能性があると思いました。

〈塚原圭二〉

この図書館の名前の由来として、「現在と過去のことを多く知る事で、未来の自分のためのスイッチを ON にできる場所」として名付けられ図書館である。この図書館は、2020グッドデザイン賞をはじめ様々な建築物としての評価を受けており、自然彩光と電気による人工照明を採用し、読書に必要な館内の明るさを保ち、夜間は館内からの照明が芝生広場や通行帯を照らすことで、安全に通行できる環境になっている。

ミライ on 全体としては、県立図書館、私立図書館、市の資料館が併設されており長崎県との共同運営方式で運営されており、図書資料等の充実や新聞、雑誌類の充実、読書・学習環境の充実と様々な利点もあるが、共同運営方式であるがゆえ、その事から職員間の一体感の維持や図書館運営を担う人材の育成、図書館のICT化にともなう財源のかくほ、施設空間や敷地の有効活用などの課題も伺えた。

〈勝田達也〉

名称は公募の中からの高校生の案。あなたの、自分の未来のスイッチを ON とのこと。建物は文化施設らしく市のアイコンとなるデザインでした。未来らしく子供に配慮し、一つ屋根の設計で明るい館内

は様々な世代が同じ屋根の下に集うイメージが感じられます。県と市の共同事業で、建物の面積按分により費用を負担しています。永続的な費用負担の面では市としてのメリットは大きいと思います。またその他のメリットは施設や人材の規模が大きいこと、市民だけではなく広く県民に扉が開かれ発信が行われていることです。運営面では県と市がそれぞれの役割分担をいかに機能的に活かしていくかの課題を感じました。例としてはそれぞれの企画したイベントがすり合わせ出来ていなくてかぶってしまうなど。また人員の移動も県と市では違うので長期、中期、短期の運営に齟齬を生じる可能性があります。しかしながら運営していきながら改善できると思いますのでこれからが楽しい施設です。人口9万7千人の大村市に県の中核図書館が存在することは大村市民の誇りであり、住みやすさの向上につながると感じました。

〈矢口勝雄〉

昼食会場から地図を頼りに目的地へと歩いていくと、そこに現れたのは弧を描き一面ガラス張りの大きくモダンな建築物、それが今回の最初の視察地であるミライON図書館でした。素晴らしく立派な建物であることにまず驚かされましたが、こんな大きな公共施設が駅前の一等地にあることが驚きでもあり、またそれが多くの自治体で共通する中心市街地が抱える課題を図らずも表現しているのだと思います。

この施設の一番興味深い点は、長崎県と大村市との共同所有であることです。県立図書館が県庁所在地である長崎市ではなく、なぜ大村市にと思いましたが、適当な用地が見つからず県知事と大村市長との個人的な繋がりでこちらへの建設が決まったとの事でした。

共同所有ならではの規模で、九州最大の収蔵能力を誇っています。県内のどこの図書館でも返却が可能である事は、県内の遠くから来られる利用者にとって利便性が高いと感じられ、県立図書館としての価値を評価できます。一方で共同運営は難しいのではないかと想像したところ、やはり課題はいくつかあるとの事で、この点は具体的に何点か上げられておりました。特に県・市の職員間の一体感の維持、醸成が難しいとの事です。

視察終了後JR大村駅に向かうと、市の玄関口であるはずにも関わらず、電車に乗るまでの間、駅員の姿を見ることはなく、地方の鉄道の現状を肌で感じました。

〈奥谷崇〉

長崎県と大村市との共同運営とのことで、視察前ほどのような役割分担をして運営にあたっているのか興味がありましたが、維持管理費等は建物面積の按分によって決められており、それぞれの役割も明確に決められていました。蔵書数も九州で最大規模の約202万冊とのことで、他の図書館でも返却が可能となっている点に関しては、県民・市民の利便性も高く、非常にいい仕組みであると感じました。

**11月10日(木)**

視察日	令和4年11月10日(木) 11:00~11:45
視察先	震災ミュージアム【熊本県阿蘇郡南阿蘇村(人口1.0万人、面積 137.3 km <sup>2</sup> )】
目的	2016年に発生した熊本地震の当時の被災状況をボランティアガイドから直接聞き、今後の防災対策、減災対策に役立てる
内容	新阿蘇大橋の視察及び震災ミュージアムの運営について

## ◆新阿蘇大橋について

### 1. 施設概要

国道 57 号線沿いの南阿蘇村立野と、同村河陽をつなぐ全長 525m、最大橋脚高 97m の橋。2016 年 4 月の熊本地震で崩落した阿蘇大橋に代わり、2021 年 3 月、元の場所から 600m 下流に架橋された。複数の橋脚と上部の橋桁を一体化させた PC ラーメン橋で、地震などの揺れに強いのが特徴。歩道も設置され、歩いて渡ることも可能。（※熊本県観光連盟のホームページから）



## ◆震災ミュージアム（旧東海大学阿蘇キャンパス）について

### 1. 施設概要

震災前は旧東海大学阿蘇キャンパスで、全国から約 1,000 名の学生が学ぶ「牧場・農場一体型キャンパス」だった。2016 年 4 月の本震では、断層が鉄筋コンクリート造の 1 号館の真下を通り、広場には全長約 50m に及ぶ地表地震断層（右横ずれ断層）が現れた。地震の発生が深夜だったため人的な被害は免れたが、一部実習施設を除いてキャンパスは移転。現在は建物の被害と断層の関係を観察できる場所として、1 号館の一部と地表表層断層が一般公開されている。



## ◆各自の感想

〈内田卓男〉

2016、熊本地震時のメディア報道で何回も見たことのある崩落した阿蘇大橋に代わる新阿蘇大橋を視察して、阿蘇ミュージアムへ。ここは東海大学阿蘇キャンパス跡。県の施設として公開。地表断層をそのままの状態が保存展示。校舎をそのまま保存強化して展示。

学生の居住していた新しい 2 階建てアパート 1 階部分がそっくり倒壊した映像等が、改めて甦ってきた。阿蘇地域はいずれまた、起こる危険性を秘めていることを思う時、他人事とは思えない。

〈矢口清〉

平成 28 年 4 月 14 日午後 9 時 26 分、マグニチュード 6.5、最大震度 7。本震平成 28 年 4 月 16 日午前 1 時 25 分、マグニチュード 7.3、最大震度 7。の地震が熊本地方を襲った。熊本地震では最初に起きた揺れよりも大きな揺れが 28 時間後に起きたことにより、「最初に起きた揺れが本震とは限らなので、油断せず備えなければならない」という教訓を残してくれました。

2016 年熊本地震では、南阿蘇村内で多数の土砂崩れ地すべりが発生しました。その結果、「阿蘇大橋」「俵山トンネル」「国道 57 号」といった熊本市方面と南阿蘇村・宮崎方面及び阿蘇市・大分方面をつなぐ主要道路をはじめ「JR 豊肥本線」「南阿蘇鉄道」の鉄道路線も寸断されました。

防災は、自分のためだけじゃない。自分が生き延びることで、大切な誰かを悲しませないように、そして生き残って大切な誰かを救うために必要なんです。

震災遺構として、旧東海大学阿蘇校舎 1 号館及び地表地震断層があった。地表面に現れた地面の隆起や亀裂、地面の横ずれを見ることが出来た。旧 1 号館と地表地震断層の全景を見ることができる。旧 1 号館中央部前では、外壁の亀裂や階段の損傷などなど地震の凄まじさを感じました。正面玄関前では、地面に生じた多数の亀裂や段差、地面の隆起を見る事ができる。

地震が多い日本では常に備えておかなければならない。このような地震の爪痕を見ることも大事である。備えあれば患いなしである。

〈海老原一郎〉

震災ミュージアムでは、地震で現れた断層や旧東海大学阿蘇キャンパスの被害状況を間近に見ることができます。私も、東日本大震災を体験していますが、地震の怖さを改めて、感じました。

〈篠塚昌毅〉

熊本県では、2016 年に発生した熊本地震を通して得られた教訓等を後世に伝えるため、県内各地に点在する地震断層や震災建物等の震災遺構と熊本地震を伝える拠点等を広域的に巡る回廊形式のフィールドミュージアムを 2023 年に開館を予定し、旧東海大学阿蘇校舎敷地内に整備しています。現在は地震の被害を受けた旧東海大阿蘇校舎 1 号館の震災遺構見学を実施しています。敷地内に現れた地面の隆起や亀裂、地面の横ずれや外壁の亀裂や階段の損傷など地震の凄まじさを感じる旧一号館中央部が見る事が出来ます。1 号館は元々ひとつの建物で、建物の両側に耐震補強工事を実施していましたが、地震の時に耐震補強をしていない中央部分が激しく損傷したので、建物を保護するため三つに分断して残してありました。

ミュージアムの目的である震災の教訓を後世に伝えるために、ボランティアガイドの方々が当時の地震の状況や災害時の対応などなどの説明を実施しています。昨日、茨城県では最大震度 5 の地震が発生し、今後も余震の恐れがあることが気象庁から発表されていますので、日頃の災害に対する備えや災害時の対応など、再度チェックし、災害に対応する為の訓練や災害時の心構えの重要性などを再認識した研修会でした。

〈小坂博〉

災害の教訓を後世に残すことは大変なことと思われまます。なぜなら次の災害がいつ来るかわかりません。10 年後なのか 100 年後なのかわからないということです。それでも災害の記憶をつなげ、準備をしなければなりません。そのために実際に災害をうけた施設を保存し維持していくことが必要で、あわせて若い人や後世の人に伝え、啓蒙することが大切なことと感じました。

〈下村壽郎〉

地震エネルギーがもたらした地震動、地盤変動の大きさによる甚大な被害に改めて驚きを感じました。

ガイドの方から、旧東海大学阿蘇校舎の被災状況と周辺地域について説明を受けました。旧東海大学阿蘇校舎では、一つの建物で耐震補強をした範囲と範囲外の被害に大きな差があり、耐震補強をしていない範囲は建物主要構造部の柱や梁のコンクリートが剥がれ落ち鉄筋がむき出しとなり曲がっていて、到底建物を支えられない状況でした。

不特定多数の人々が集まる施設や学校校舎などは、耐震診断の後、耐震補強をしたとしても安心できない。旧東海大学阿蘇校舎の被災状況がそれを示しています。

今後、新築される建物については、建築技術の進歩により安心安全な建物が建設されると思われます。

新阿蘇大橋は、この地域の生活道路であるため、早急の災害復旧が望まれ完成したとのこと。最新の土木技術により地域の地盤を考慮した構造の橋梁であるとの説明がありました。大自然の中では、堅固な構造物も小さくて弱々しく見えたのは私だけでしょうか。

災害はいつやってくるか分かりません。防災は、一人一人が十分な備えをしている事です。さらには、災害時には「まずは自分が生きることです」そのうえで誰かを救うことが大切です。このことは東日本大震災により被災地域を視察した時の語り部の講和で学んだことです。今回の視察で、私たちの日常生活で忘れがちな災害への備えと行動は、学校や地域防災訓練等でも常に周知と指導が大切なことと強く感じたところです。

〈島岡宏明〉

まず初めに驚いた事は活断層によって分断された旧東海大学阿蘇キャンパスが無残にも 1メートルもある支柱のコンクリートがもの見事に破損していたことです。

そして、私たちが土浦市の各小学校の耐震補強を数年前に施工しましたが、内心本当に効果があるのだろうかという気持ちを見事に裏切っていただき、扇形の校舎にある左右の耐震補強された部分が全くと言っていいほど損傷を免れていたことに驚きました。耐震補強の優れた技術は本物だったんだと。

全国にまだまだ耐震の補強がされていない建築物が沢山あると思いますが、この旧東海大学阿蘇キャンパスを見る事で、早急に耐震補強をしなければいけないという気持ちになると思います。また、もしこの熊本地震が建物の密集した大都市で起きていたら全てのインフラも破壊されているのではないかと思ひ、私はこの現場を見たことで災害に対する備えを今一度見直し「備えあれば憂いなし」の言葉通り準備していくべきだと感じました。

〈塚原圭二〉

まず初めに、熊本地震によりお亡くなりになりました方々のご冥福をお祈りしますと共に、未だ避難生活をされている皆様の早期の復興を心よりお祈り申し上げます。

今回現場を訪れて、改めて自然災害の恐ろしさを実感することとなりました。視察場所へ向かうバスからは、大自然の山々が広がり、川が流れ風光明媚なところであるが、目を凝らしてみると無数の土砂崩れの跡や被害を受けた旧東海大学阿蘇キャンパスに通じる橋の崩落現場が未だに残っており、地震の凄まじさを思わせる光景でした。

いざ、旧東海大学阿蘇キャンパスに向かってみると、地表地震断層が敷地内から校舎の中央部に現れたことで大きな被害を受けていた。この校舎を見ると、1号館を中心として左右に扇型になっているが、左右は耐震補強がされていたが、中央部はされていなかったためと考えられ、いかに耐震補強が重要で

あるかを目の当たりにした視察でありました。

〈勝田達也〉

震災が発災した時にはとにかく自分の身を護れ。ガラスの破片が散乱しているので手袋とスニーカーを近くに置いておくこと。発災場所で被災された方からの話は、説得力があります。様々な地域からの高校生も多く訪れていました。旧東海大学阿蘇キャンパス。多くの方々に被害が出た場所です。大学の構内という身近な場所に断層による地割れが保存されていて見えていること。その断層上の校舎が大きく損壊していること。開口部に耐震補強した建物は損壊が少ないこと等を実際に見て理解できました。学生で賑わっていた写真を見ると胸が痛みます。地域の避難訓練でもこのような建物、断層を見ながら行うことが出来ればまた有効ではないかと感じます。

〈矢口勝雄〉

今回の視察で一番インパクトがあったのが、こちらの施設でした。ミュージアムへの道中では、地震で崩落した阿蘇大橋の橋げたや大規模な山腹崩壊が目に見え込んで来ました。この地震がいかに大きなものであったのかを実感します。ミュージアムでは施設を案内される多くのボランティアの方が迎えてくれました。修学旅行と思われる高校生のグループも多数訪れていました。ミュージアムは東海大学阿蘇キャンパスであったところを震災遺構として一般公開されているものです。本震で生じた断層の亀裂が校舎の真下を通っており、この地表表層断層と呼ばれるものを遺構として保存していくためにお金と手間をかけていることに感心しました。

断層上の校舎は当然大きな被害があったものの、耐震補強工事を施してあった部分には大きな被害が生じておらず、本市でも進めてきた小中学校などの建物へ耐震補強工事を行う価値を理解できました。熊本地震の記憶を残す、語り継いでいくことをこの地域の方々が取り組んでいる事に強い印象を受けました。

〈奥谷崇〉

未だに山肌が崩れた様子が残っており、地震の被害の大きさを目の当たりにしました。震災ミュージアムとなっている旧東海大学阿蘇キャンパスでは、ボランティアガイドの方から建物の被害状況や、敷地内に残った地表断層について説明していただき、巨大地震の恐ろしさを実感しました。特に、1号館の耐震補強された部分とそうでない部分の違いがはっきりと判り、改めて耐震補強の重要性を感じました。地震発生が夜間だったことで、キャンパスでの人的被害はなかったとの説明でしたが、学生がいる日中に地震が発生していたら、と考えるとゾッとしました。巨大地震の被害を後世に伝えるためにも必要な施設であり、多くの方に訪れて頂きたい場所だと感じました。

## 11月11日(金)

視察日	令和4年11月11日(金) 9:30~10:30
視察先	こととば那珂川【福岡県那珂川市(人口5.0万人、面積 74.95 km <sup>2</sup> )】
目的	博多南駅周辺公共施設における市と指定管理者の協働プロジェクトによる管理運営の状況を視察する
内容	こととば那珂川について
担当課	都市整備部地域づくり課 結城課長、高木係長

## ◆「こととば那珂川」について

### 1. 施設概要

2018年3月にリニューアルオープンした博多南駅前ビル。愛称は、賑わいをもたらす「市（イチ）」と那珂川の「ナカ」を組み合わせ「ナカイチ」と呼ばれている。幅広い年代の人に利用してもらえるようくふうが凝らされ、1階はバスの発着所があり、待合所としての役割の他に地域の情報を集めたインフォメーションセンターや、アート・カルチャーを発信するギャラリースペース、飲食店・物販などのスペースがある。2階はパークフロアとなっており、カフェも併設。3階にはシェアオフィス・コワーキングスペースを備えるワークフロアがあり、会社のオフィスやサテライトなど多様な用途での利用も可能。4階はガーデンフロアとなっており、屋上庭園や屋上農園、多目的スペース、「地域住民と那珂川の生産者をつなぐ」をコンセプトにした飲食店の展開など、那珂川のコミュニティスポットとして活用されている。



## ◆主な質疑応答

Q：リニューアル前はどんな状況だったのか？

A：平成17年にまちづくり交付金を利用して市が建てたが、テナント区画は補助対象外。建物内には高度情報処理センターや住民ステーションなどがあったが、利用者数は伸び悩み、特に土日の利用者が少なく、ゴーストビル化していた。その後、地方創生臨時交付金を活用してリニューアルに取り組んだ。

Q：「箱（ハコ）」ではなく「場（バ）」を作る、との説明だったが、その後の利用者数の推移は？

A：リニューアル前と後では会議室の数が違うため、単純な比較は難しいが、現在1階の利用件数は年間で400件、2階は500件となっている。また、自転車の駐輪台数は平成28年が156,000台だったのに対し、平成4年には194,000台に増加した。

Q：このような事業はソフト（個人力）が突出していないと成功しないと思うが、成功のキーマンは？

A：今回は公開型のプロポーザル方式で4社から事業者を決定した。事業開始後、3年が経過した後はどうするかがカギとなる。宮崎県の油津商店街の再生を手掛けた方を招聘し、事業全体を監修してもらった。今では指定管理者チームの一員になっていただいている。

Q：リニューアル後の駅の年間利用者の推移は？

A：詳しい数字は開示されていないが、15,000～16,000人程度で推移していると聞いている。

## ◆各自の感想

〈内田卓男〉

博多南駅という希少な新幹線駅があることに出会いました。博多駅から本線を外れ、電留基地へのまさにそのど真ん中に駅があるとは、8, 5キロ、片道300円、往復600円の料金で驚きでした。博多駅から、まさに東へも西へも事実上の始発駅となる駅があるとは、夢にも思いませんでした。福岡市のベッドタウンであり、新幹線の始発駅だなんて、駅ビルも、もっともっと知恵を働かせれば、町の発展はかぎりないように思える。

本題のこととば那珂川は、オープン以来低迷期を経て、2018年リニューアルオープンした博多南駅ビル。限り無い発展途上の若い街という、強い印象を持った。

〈矢口清〉

那珂川市は、福岡県の中西部の筑紫地域に位置する市。市内を南北に貫き、福岡市中心部へ流れている那珂川が市名の由来である。

こととば那珂川（博多南駅前ビル）の取り組みについては、2014年から始められている。1日約1万5,000人の乗降客がある「博多南駅」。その駅前に立つ4階建ての市所有の公共施設である。急速な人口増を続ける駅周辺に対し、駅前ビルは利用者が伸び悩んでいた。駅利用者依存したビル運営から脱却し、ビルそのものに価値を見出すことにシフト。

今では、多様な価値観を持つ人が気軽に交流できる場となり、市内・市外関係なく、那珂川市に興味を持つ人が集まる「関係案内所」へと移り変わっている。

〈海老原一郎〉

こととば那珂川は博多南駅前ビルですが、やはり駅の乗降客が増えないと、利用者数が増えないので、経営が厳しいようでした。そういった点から、土浦駅ビルはJRの施設ですが、乗降客の推移を把握しておかなくてはならないと思いました。また、施設内のシェアオフィスやコワーキングスペースは、満室で、土浦市にも、あっても良い施設だとも思いました。

〈篠塚昌毅〉

福岡県那珂川市の博多南駅前ビルを改修した「こととば那珂川」の取り組みについて学びました。博多南駅は新幹線の車両基地が有り、博多から新幹線でひと駅、8分間で到着する駅です。料金も格安の300円！博多南駅前ビルは平成17年に国のまちづくり交付金をもとに建設しましたが、施設の利用者数の減などに伴い事業の見直しを検討し、平成26年より有識者を交え、駅ビルの活用方法について議論を重ねて、具体的な施策案が提言されました。特に「ハコ」ではなく「バ」をつくるための仕組みづくりをコンセプトに駅ビルを拠点とした観光資源や地域資源のPR、住民、事業者と参画促進、官民の架け橋となるように平成27年に「まちづくりオフィス」を設置しました。

現在は、管理運営を地元企業やまちづくりアドバイザーが設立した民間企業に指定管理者として委託しています。建物内にはレンタルオフィス、保育施設、屋上には庭園とビヤホールが有り、今は牡蠣小屋が開設され、年々利用者が増加しているそうです。街の活性化はハード事業を官が、ソフト事業を民が実施する事が成功に導く方法である事を証明したような「こととば那珂川」の事業でした。

〈小坂博〉

指定管理者の話しならどこにでもある話ですが、運営に関しては外部から他の自治体で実績のある木藤さんという方が主導的な役割をされたようです。

以下…抜粋です。

木藤さんは

まちづくりって『ドラゴンクエスト』みたいなものなんじゃないかと。悪のボスを倒しに行くとき、1人だと倒せない、必ずパーティー(チーム)を組んで臨みますよね。個性豊かなキャラがいて、それぞれに特殊能力や弱いところがあって。油津や那珂川市ではまさにそういう風にいろいろな力をもった人達がチームを組んで物語を達成することができた。僕1人だったら無理でした。

一方で、その中心にいる主人公『勇者』ってなんの特徴もなくて、平均的な力しかないんです。しかし魅力的。なぜか?彼は父をその悪のボスに殺されていて、『あいつを絶対倒してやる!』という使命感と腹をくくった覚悟だけはもっている。それが大切なんです。そんな勇者が真ん中にいれば、周りに魅力的な仲間が集ってくる。…以上

〈下村壽郎〉

那珂川町の施設であった博多南駅前ビルを2018年の市制施行の年に合わせてリニューアルし、駅利用者に依存したビル運営から脱却し、ビルそのものに価値を見出すことにシフト。今では、多様な価値観を持つ人々が気軽に交流できる場となり、市内・市外関係なく、那珂川に興味を持つ人々が集まる関係案内所へと移り変わっている。との説明がありました。

リニューアルするまでに、駅前ビル活性化検討会議の開催

検討の結果、必要なのは、「ハコ」ではなく、「バ」をつくること

2015年からスタートした「こととば那珂川」の活動は、コンセプトは「ハコ」ではなく、「バ」をつくること。地域団体や組織、そこから生まれる様々なニーズによって、駅前ビルの名称やビルの各フロアのコンセプトが決定されたと考えます。市民と協働のまちづくり活動の事業には、市民が抱く「シビックプライド」や「きっかけ」をどのようにリードするか、これらが良い方向に回転するような運営が大切であると、改めて感じさせられた視察となりました。

〈島岡宏明〉

那珂川市は福岡県の西部にあり、福岡市の中心部から13キロの所に位置しております。特筆すべきは新幹線の博多南駅がある事で、どこの駅でもその駅ビルの利用方法に苦慮している市が多いと思います。

土浦市では幸いにも星野リゾートのBEB5が駅ビルに入ってきてくれましたが、それがなくなると閑散とした駅ビルになっていたことと思います。

今回の駅ビルをより活性化する目的で有効利用しているこの場所では多方面での利用方法を考え、例えば子供たちが楽しく遊べるスペースがあり、楽しい居住スペースとして生き返っていたような気がします。また、ワークスペースもあり、ベンチャービジネスの人たちにとっても、駅からも近くとても使いやすい場所となっていたと思います。

このように駅近という事でそれに合った色々な施設が複合して集まっていることで利用しやすい空間になっていると感じました。

土浦市でもいろいろな階層の人たちが集まれる駅ビルのあり方を考えていかなければと感じました。

〈塚原圭二〉

那珂川市は、福岡県の西部にあり、福岡市の中心部から13キロのところに位置し、人口5万人の市であるが、恵まれた自然環境や福岡市の中心部から至近距離にあり、新幹線の博多南駅があることで、通勤の利便性から住宅地として脚光を浴びている。

今回の施設は、これまであった駅ビルをより活性化する目的で検討が始まり、「箱もの」ではなく、「場所」をつくるための仕組みづくりを構築し、指定管理制度の見直しによる「メンテナンス」と「マネジメント」を切り分け、拠点となる駅ビルの運営を行い、駅前地区や町全体を対象に「エリアマネジメント」の概念が取り入れられている。施設には、バスターミナル・公園・カフェスペース・ワークフロアー・屋上ガーデンと地域の方々や事業主の方々が施設を拠点として関わることで集いの場所・憩いの場所として素晴らしい交流の場所となっている

本市としても、アルカス土浦がこの様な場所に少しでも近づけば駅前の活性化につながると思われる。  
〈勝田達也〉

「ハコ」ではなく「バ」をつくるしくみづくり、をコンセプトに利用数で伸び悩んでいた駅前ビルを市民とともに、駅前ビルのみならず町全体の活性化の拠点となるように検討しリニューアルしました。館内には2階「こととぼのぼ」、3階シェアオフィス（ワークスペース）、4階「博多南ナチュラルピアガーデン」、屋上庭園は近隣の保育園の子どもたちが多く訪れていました。まちづくりにかかわる人材、次世代の担い手育成については、そこに集った若者が駅ビルのスタッフとなり人々の交流が出来てきています。また若者の役割分担としてメディアへの発信も行っています。

〈矢口勝雄〉

こちらの施設は博多南駅に直結しているのですが、駅は新幹線の基地内にあり、ここへの回送列車を利用した専用線でとても興味深い立地となっていました。平成17年に市が建設したものの当初は利用者が少なく、活性化の検討を始め「ハコ」ではなく「バ」を作ることの検討結果を得たとの事でした。特に目に付いたのは「まちづくりオフィス」と名付けられたパソコンステーションでした。リモートワークが一般化する中、ビジネス用のプライベートスペースの需要は確実にあると思います。駅前テナントの空室対策として有効な方法であり、大変参考になりました。

〈奥谷崇〉

博多のベッドタウンである南博多駅前に立地する駅前ビル。平成17年のオープン後、利用者数の低迷により民間の力を借り、「ハコ」ではなく「バ」をつくるためにリニューアルしました。市民の憩いの場だけではなく、3階にはシェアオフィス・コワーキングスペースが設けられ、リモートワークが働き方の一つになってきた現在においては、非常に興味深い取り組みでした。本市においても中心市街地の空き店舗、ビルの空床対策として有効な手段となると感じました。

報告書作成：奥谷崇